

青少年の性行動と性規範

片瀬 一男（東北学院大学）

1. はじめに

近年、性行動の低年齢化が指摘されている。そして、今日の青少年の中には、かなり早い時期から性的な体験をする者も少なくないと言われている。そこで、本報告では、青少年の性行動の背後にある要因として、①性規範のあり方、②性欲求や性イメージの発達、③社会的要因（家庭や学校への適応および社会統制の強さ）に注目しながら、性行動の低年齢化のもつ意味を考察する。

性行動の低年齢化に関する従来の議論においては、一方では、性に関する社会規範が変化し、性に対する社会的抑圧や否定的なイメージが払拭されたために、青少年が本来的にもっていた性欲求が行動化したとも言われている。しかし他方、今日の青年には、受験競争などによる不満や圧迫感、学校・家庭への不適応から、性行動に逃避する傾向もあるという指摘もされてきた。つまり、性の抑圧が弱まったために、性欲求が容易に解放されるようになったのか、それともそれ以外の社会的抑圧や不適応が高まったために、性行動が低年齢化したのか。そのいずれの要因が青少年の性行動の背後にあるかによって、彼らの性行動の意味あいはい大きく異なる。

また、性行動は、基本的に男女2人の行為者によってなされる社会的行為である。とりわけ、性行動が低年齢化した場合、実際に性行動を行う男女の間に、性規範や性的欲求の発達に関して隔たりはないだろうか。もし、比較的、低年齢の男女の性規範や心理に違いがあるとしたなら、その違いは彼らの性行動にどんな帰結をもたらすのだろうか。

2. 調査データの概要

本報告における分析で用いるデータは、（財）日本性教育協会（JASE）が行ってきた「青少年の性行動」調査による。この調査は、1974年、81年、87年の3回にわたって、全国の青少年を対象に行われてきたものである。このうち、今回の報告で主として取り上げるのは、第3回調査（1987年）のデータである。

というのも、第2回調査までは高校生と大学生のみを調査したが、今回の調査で初めて中学生も調査対象に含められたからである。したがって、10代前半から20代前半にわたる広範な年齢層について、性規範や性行動の変化・発達を追跡できるだけでなく、性行動の低年齢化についても、より詳細な分析が可能になった。

なお、第3回調査の有効サンプル数は、合計 8,681人（中学生男子 1,800、同女子 1,799、高校生男子 1,621、同女子 1,649、大学生男子 896、同女子 916）である。

3. 調査結果の概要（図表は省略）

(1) 性行動の低年齢化

まず最初に、今日の青少年において、実際に性行動が低年齢化しているのか検討しておこう。第2回調査と第3回調査の結果を比べると、いくつかの点で性行動の低年齢化というべき現象がみられる。

たとえば、キス経験年齢（初めてキスをした年齢）の分布をみると、男女とも、87年では81年に比べて、12～15歳にキスを経験したという者が増え、逆に18歳以降に初めてキスを経験する者の比率は減少してい

る。同様の傾向は、性交経験年齢の男女別分布からも読み取ることができる。とりわけ男子では、この6年の間に18歳以前に性交を経験する者が増え、それ以降に初めて経験するという者は少なくなっている。

(2) 性規範の発達

青少年の性規範の発達の变化を明らかにするために、婚前性交に対する規範意識を年齢別に集計してみた。その結果、男女とも年齢があがるにつれて、婚前性交を肯定する者が増加していくことが分かる。そして、大学4年生の時点では「互いの納得」を前提に婚前性交を肯定する者は、男子で6割、女子で5割にのぼる。

また、こうした規範意識は、実際の性行動の経験とも関連している。男女とも、またどの年齢層においても、婚前性交を肯定する者は一貫して性交経験者に多い。ただし、性交経験の動機との関連をみると、性に対する規範意識が直接、青少年の性行動を規定しているとは言いきれない側面も見られる。

(3) 性イメージの発達

性規範と同様、性に対するイメージについても年齢による発達傾向が見られる。ただし、性イメージの発達においては、男女差が大きいことにも注意する必要がある。

まず、男子においては、16歳頃までに、性行動を促進するような肯定的な性イメージ（「明るい」「良い」など）をもつ者が急増する。また、この時期に、性行動を抑止する否定的なイメージをもつ者は、「はずかしい」を除いてほとんどいなくなる。

これに対して、女子の性イメージの変化は、かなり遅れて生ずる。否定的な性イメージをもつ者は、男子の場合と同様、早い時点からそれほど多くはないが、積極的な性行動を促すような肯定的な性イメージが形成される時期は、むしろ20代になってからである。

(4) 性欲求の発達

性欲求の発達過程にも、同様の男女差が見られる。たとえば、過半数の者がキス欲求や性的興奮、接触欲求などの性欲求を持つ年齢の分布を男女別に集計してみると、性欲求の発達における性差が明確になる。

すなわち、まず男子においては、どの性欲求についても、それを自覚した者が過半数を越える年齢が14～16歳に集中している。これに対して、女子の場合、異性への接近欲求の経験者が過半数を越える時期が男子より早いものの、キス欲求や性的興奮、接触欲求が過半数の者に経験される時期は、男子より5歳前後遅れた20代になってからである。

つまり、性行動が青年期前期へと低年齢化する中で、10代の男女の性心理には少なからぬ隔たりが見られることになる。そして、このことは実際の性行動の動機における男女差となって現れてくる。この年代においては、とりわけ男子から女子へ積極的な働きかけが行われ、女子は自らの性欲求を自覚しないまま受動的に性行動をしているように思われる。

(5) 性行動の背後にある社会的要因

青少年の規範意識や性心理とは別に、彼らを取り巻く社会環境の要因も、今日の性行動の低年齢化と関係がある。すなわち、青少年に対する社会統制が弱い場合には、性行動が活発化する傾向がうかがえる。

他方、現実の社会環境だけでなく、青少年がそうした環境を主観的にどう受け止めているのかも、性行動の低年齢化に密接に関わる。とりわけ男子においては学校を楽しみと思えないことが、また女子では家庭の中に楽しみを見いだせないことが、早い時期の性行動へと彼らを駆り立てる1つの要因となっている。

つまり、性行動の低年齢化には、青少年の社会的な不適応状態が関与していることも見逃すことはできない。